



【身体教育・社会学】

泳ぎ方が? 「水府流水術」を訪ねて

日本には連綿と受け継がれている泳ぎ方があります。川や湖、海など地域それぞれの水域に適した形で発達した「日本泳法」です。現在は13の流派が存在します。そのうちのひとつ、茨城県水戸市で継承されている「水府流水術」の歴史的背景をお聞きし、泳法の一部を見せていただきました。



年齢にかかわらず 生涯続けられる

横向きで水面から顔を出し、足は水を挟み込んで押し出すような「あおり足」で進む。下の手を水中で前に伸ばし水をかく。茨城県水戸市に江戸時代から伝わる日本泳法の一流派、「水府流水術」の代表的な泳法の一つ「一重伸」だ。

水府流水術協会が、「子どもたちと成人を対象に毎週、那珂川べりの青柳公園屋内プールで水府流水術の教室を開いている。

同協会の榎村幸治さんは水戸市水府流スポーツ少年団の団長として子どもたちを指導する。榎村さんはスイミングスクールに通って競泳選手を目指していたが、小学校4年生のときに断念する。競泳をやめたことを知った担任の教師に日本泳法大会への出場を勧められ、水府流水術を始めた。

「他の運動はダメでしたが泳ぐのだけは得意でしたし、また水泳が続けられると思って。日本泳法は競泳と違いタイムを競うものではありませんから、水府流も年齢を問わずにできる生涯スポーツです。42年続けていますが、まだ極めたとは思っていません」と微笑む。

なぜ

180種もの 日本泳法の一流派



1 那珂川のほとりにある「水府流水泳道場跡」の石碑。上流と下流では流れの速さが異なるため、泳法にも違いがあった 2 水府流水術を育んだ那珂川。かつてはもっと遠浅で、川のなかほどまで立ち込むことができたという 3 水府流水術協会の櫻村幸治さん。水戸市水府流スポーツ少年団の団長を務める 4 水府流水術の教室に参加している子どもたち。これからの日本泳法の担い手となる



一重伸

一重伸 ひとえのし

水府流水術の代表的な泳法の一つ「一重伸」。体が上下動せず伸びが長い、ゆったりと余裕のある泳ぎが理想とされる



城下町の水戸は北に那珂川が流れ、南に千波湖が広がり、東の太平洋も遠くない。水戸という地名が表す通り、「水の出入り口」となる土地だ。しかも江戸時代の千波湖は今の5倍の大きさだったという。したがって、国を守るためには戦国時代から「水術」に長けた人材が必要だった。「橋などないですから合戦で伝令を走らせるのに川や湖を泳げなければ役目を果たせません。古くから水泳が発達したのは地理的要因がまず大きい」と話すのは水府流

国を守るために必要だった「水術」

日本泳法大会は、全国各地の日本泳法の流派が集い、「形」で競い合う得点競技が中心の大会だ。水府流水術の場合、「伸し泳ぎ」を基本とし、横向ききの「横体」、平泳ぎに似た「平体」、立ち泳ぎの「立体」、さらに「飛込」「潜水」「浮身」に大別されるが、細かく分けると180種類に及ぶ。なるほど一生をかけて極めるに値する泳法だ。それにしても、なぜ180種類もあるのか。その謎は水戸の土地と歴史に潜んでいる。



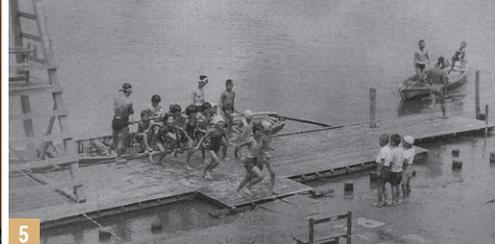
甲冑およぎ

櫻村さんが披露してくれた「甲冑およぎ」。水府流水術の場合、鎧と兜のみならず袴をはき、籠手や脛当も装着しているので裸身に比べて20kgほど重くなる。難易度は高いが櫻村さんは見事に泳いで見せた。左半身を上にして泳ぐのは脇差を落とさないため

甲冑およぎ



5 1956年(昭和31)の水府流水術の稽古場風景。かつてはこのような稽古場がいくつもあった 提供:水府流水術協会 6 水府流水術協会会長の山口伸淑さん(右)と副会長の荒川伊望さん(左)



水術協会会長の山口伸淑^{のぶとし}さん。

徳川御三家の一つとなった水戸は「水府」と呼ばれた。初代頼房、二代光圀以来、代々の藩主のもとで水泳術が発達する。「為政者の庇護・奨励と、泳ぎを指導する人的資源の豊かさも、水府流水術が長く継承されてきた要因です」と山口さんは明かす。

180種類の泳ぎの型には、それぞれ理由がある。例えば横体の「たぐり伸」は、張り渡した綱をたぐりながら泳ぐ伸し泳ぎだ。立体の「両拔手」は、水面から飛び上がって少し先を見たり、船べりや岸辺・小岩に飛びつく際の動きを形にした泳法。底が浅い、流れが急、障害物が流れてくる——川

や湖の佇まいは場所によって異なり、なおかつ移り変わる。また、武器や荷物を身につけ運びながら泳ぐ必要もあった。「自然環境や目的に合った泳ぎ方が根づき、少しずつ変わりながら伝承されたのだと思います」と山口さんは言う。

多様な環境の水域に囲まれた水戸という土地で、身を護り安全に水を渡るための泳法が豊富なバリエーションを生んだのは、当然の成り行きだったに違いない。

継承の場はプールへ 遠泳大会も復活

明治時代の廃藩置県後と終戦の直後に一時的に中断されたのを除

き、水府流水術の教習は途絶えたことがない。「水質汚染により那珂川で泳げなくなった1963年(昭和38)頃までは、川べりの水泳場で教えていました。ピーク時には7つの水泳場に生徒が6000人以上いました」と山口さんは振り返る。

那珂川の水泳場が順次、閉鎖になったのは、ちょうど小学校にプールが設置されはじめる時期だった。1970年(昭和45)には、青柳公園に東洋一といわれた6面の巨大な屋外プールが完成した。同年、主要な水泳場の師範が大同団結し、那珂川で練習できなくなっても水戸に伝わる日本泳法を後世へ受け渡すべく、水府流水術協会



取材や撮影にご協力いただいた水府流水術の教室参加者。都内など県外から毎週訪れる人もいる

が設立された。こうして水府流水術の指導はプールで行なわれるようになる。

しかし、那珂川でまったく泳がなくなったわけではない。1947年(昭和22)から5カ所の水泳場の主管で毎年開催されていた「那珂川遠泳大会」は、1963年に中止されたが、河川環境の改善により、1991年(平成3)から再開された。水府流水術協会も主催団体の一つだ。千歳橋から水府橋までの3.5kmを平泳ぎ、横泳ぎで隊列を組んで泳ぐ。

同協会副会長の荒川伊望^{いさみ}さんは遠泳大会についてこう話す。

「参加者には水府流水術の練習生も多いです。どこが深く流れて速いかを熟知した指導者が安全の

立泳



立泳 たちおよぎ
水底に足をつくことなく
静止する「立泳」。水
府流水術には踏み足、
あおり足、巻き足などい
くつもの形がある

小拔手 こぬきて

数ある水府流水術の泳法のなかで、もっ
とも動作が速くリズムカルに泳がなけれ
ばならないため、修得が難しい泳ぎの一
つとされる「小拔手」。クロールに似てい
てバタ足も使うが、左右交互に小さなあ
おり足を素早く使うのが本来の泳ぎ方

小拔手



平伸



平伸 ひらのし

一重伸を平体(水面に対して平ら)にし
た泳ぎ方。平泳ぎにも見えるが、顔は上
げたままで、足はあおり足で進む。海藻や
藻がある浅瀬を泳ぐときに有効な泳法



亀浮

亀浮 かめうき

頭と両手両足を水面から出す「亀浮」。浮身
の一種で、その名の通りカメが甲羅から頭や
足を出す姿に似る。自分の体の重心をきち
んと把握し、脱力も必要な浮身は実に難し
い。水府流水術には「浮身36体」と呼ばれ
る36の形を中心とするさまざまな浮身がある



ため伴泳し、船
で先導します。
小学校4年生か
ら参加できて、
80代の方も泳が
れたことがあり
ます。水面から
土手や空を見上
げると、とても
気持ちがいい。
川を泳いで初め
てわかる醍醐味
です」
水府流水術協
会は公営プール
や小学校での指導のほか、日本泳
法大会への出場に加え、審査委員
など運営にも携わる。「会員が何か
しらの役割を担い、日本泳法の普
及に貢献しています。泳ぐだけで
はなく、さまざまな社会的な経験
ができるのも『生涯スポーツ』た
るゆえんです」と山口さんは話す。
継承の場は川からプールに移つ
たが、「流れ遠およぎ」として江戸
時代に始まった那珂川での遠泳は
今も続く。さらに、水域
に応じて育まれた日本古
来の泳法は、時代を超え
て今なおそれぞれの地域
で受け継がれている。

(2024年5月12日取材)



【身体教育・社会学】

